

令和7年度 奈良県租税教育推進連絡協議会会長賞

介護保険制度

生駒市立上中学校 3年 北岡 結衣

私の母は介護認定調査員です。高齢者の家庭や病院、施設を訪問し、どのくらい介護を必要としているのかを調査する仕事です。だから母は時々私に介護についての話をしてくれます。私は母から仕事の話を聞いて、介護は本人や家族だけでは成り立たず、社会全体に支えられていることを知りました。

母の話では、訪問先では家族の補助だけでは生活が難しい高齢者が多く、掃除や買い物、入浴の介助など、日常生活の支援が必要だそうです。母は「介護が必要な人が増えているけれど、家族だけで支えるのは限界がある。だから国から補助がないと成り立たない。」

と言っていました。この言葉を聞いたとき、税金はただ取られるものではなく、困っている人を助けるために使われていることを初めて実感できました。

そこで、私は介護に関わる税金に興味を持ち、調べたところ、「介護保険制度」というものを知りました。介護保険制度は、40 歳以上の人が保険料を納め、国や地方自治体とともに介護サービスを支えるために税金が使われる制度です。介護サービスの費用は一部を本人や家族が負担するだけで、残りは税金と保険料でまかなわれます。もしこの制度がなかったら、家族だけで介護をしなければならず、精神的・経済的な負担がかかり、十分な介護を受けられない人が出てくるかもしれません。私はこの制度について調べて、税金が私たちの生活を陰で支えていることを強く感じました。

私の曾祖母はデイサービスを利用しています。曾祖母が施設に通えるのも、母のような認定調査員や介護保険制度を支える税金のおかげだと思います。また、介護の現場で働く人たちの人件費や福祉用具の費用も税金でまかなわれており、多くの人の協力があってこそ介護が成り立っているのだと感じます。

母の話や調べたことを通して、介護保険制度によって今の介護が成り立っていることが分かりました。これから日本はさらに高齢化が進み、介護を必要とする人はもっと増えるはずです。その時に「税金を払いたくない」と思うのではなく「みんなで支え合う仕組みを守るために必要なもの」だと考えようと思います。私が大人になったら母の言っていた「社会全体で支え合う」という言葉を忘れずに、税金を前向きにとらえ、介護を支える一員になりたいです。